

アイヌタイムズ 第44号 日本語版 2008年(平成20年)7月22日 火曜日

アイヌタイムズ 第44号 日本語版

★ ユネスコで「国際言語年」の話がありました

2007年5月16日に、国際連合第61回総会がありました。国中で言葉やら文化やらそれぞれ違って存在しますが、それぞれ(言葉や文化について)わかり合えるとよい、と国連総会は考えて、2008年を「国際言語年」と名づけたのでした。

2007年11月に、ユネスコ事務局長の松浦晃一郎氏は、国際言語年が来ることを喜びつつ次のように話しました;「私たちユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、この国際言語年の諸事において手助けしたり、指令を出したりするつもりですよ。私たちは、言葉というものが本当に大切なものであるということをよく理解しています。

私たちは一人一人、持っている言葉が違ってはおかげで、きちんと違った集団が生まれ、違った暮らしが生まれます。私たちは言葉によってこのようにめいめい違ってはいるので、他人が違っていてもそれを認めつつ一緒にお互いの力で幸せになれるものなのです。

ある言葉を使う人が少なければ、それで損をすることがあります。その言葉を使う人たちがもっと多くなるように私たちが手助けするならば、それによってその人たちに得をさせもして、私たちは一緒に得をしもするでしょうから、そうした結果、ひどい貧乏人はいなくなるでしょう。

また、初等教育を世界中に広げるために、字の読み書きは重要なもので、言葉によっていろんなことを私たちは教えるべきなのです。

HIV/エイズ、マラリア、いろいろな病気をしている人を治すために、その人たちの言葉を使わなければいけません。自然環境を大事にするために、いろんな土地にいる人々や先住民たちの考えを参考にするとよいです。だから、彼らの言葉も大事にするべきなのです。

私たちの言葉がたくさんあるならば文化もたくさんあるということは、書類に書かれています。『文化の多様性に関するユネスコ世界宣言とその行動指針』(2001年)、『無形文化遺産の保護に関する条約』(2003年)、『文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約』(2005年)。しかし、私たちの子孫た

ちが大人になった頃、7000の言語のうち半分ほどが無くなるだろうと言われていています。現在、学校やサイバースペースでは、その言語の四分の一しか言われていない一方、多くの言語はときどきだけ言われます。数え切れないほど多くの言語で多くの人々がそれぞれ会話しているのに、教育とか通信とか出版とかの中では言われずにないがしろにされている言語もたくさんあります。

早く何とかしなければいけません、どうしたらいいでしょう?

同じ言葉で会話する人たちに関しては、その言葉をきちんと教えて(彼らが)理解するように算段するといいです。そして、その国や世界中で、もっと多くの人たちが話す言語も理解するように勧めるといいですよ。

また、優勢である言語で会話する人たちに関しては、その国や世界中で、別の人たちの持つ言語を一つでも二つでも理解するように勧めるといいですよ。

多くの人たちが別の言語でもきちんと理解するならば初めて、彼らの持つ言葉が世界の中でどのようにあるものかがわかるでしょう。

さあそこで、私たちユネスコは、政府の人たち、国連の機関、市民社会の組織、教育機関、専門家団体、その他の人たちへ、人が言語全てを大切にするように、共に働きましようと言うつもりです。その際、消え去りそうである言語は、一番きちんと大切にして広めるようにしなければなりません。

私たちは、学校でもサイバースペースでもそのようにしたり、言語が消えないようにしたり、言語によって社会の人たちが心を同じくするようにしたり、経済や先住民や創作において、言語で私たちがどのように幸せになるのかを考えたりもするでしょう。どのようにしても、どこであっても、言語が大事なものであるということが人に教えられるといいです。

2008年2月21日は、第9回国際母語の日と名づけられています。この日からであればなおいっそう結構なことで、これから言語全てを広めるようにするといいですよ。

私たちみんなは以下のように願います。地域的、地域的、国際的段階の中で、言語がそれぞれ異なって言われたり書かれたりするといいです。教育・行政・立法制度の中とか、文化的表現で会話するときとか、サイバースペースとか交易するときとか、いろいろな言語が使われるといい、と私たちは願うのです。」[*註1]

アイヌ語だって大切にすべきものなので、アイヌタイムズ紙上でいろんな人達がアイヌ語でいろんな話を書けばいいと私は思います。

[横山 裕之] 沙流・千歳

*註1：長い長い引用文で、つい引用の最後の部分をカッコで閉じるのを忘れてしまいました。お詫びして訂正いたします。

*註2：ここに記した記事は、一字一句訳するのが非常に難しく、上の日本語は、一番最初の原文からかなり頭をひねってアイヌ語的に言い換えたり省略したりしたものです。参考のため、その原文も以下に記します。

2007年5月16日に、国際連合第61回総会で、国連総会は、多様性の中の統一、世界的な相互理解を推進するために、2008年を国際言語年としました。

2007年11月に、ユネスコ事務局長・松浦晃一郎氏は、2008年の国際言語年を祝し、次のような談話がありました：

ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)は、本言語年にあたりその活動を調整する役割を担い、先導者としての役割を果たすつもりです。ユネスコは、人類がこの先数十年にわたって直面せざるを得ない数多くの課題に対して、言語が決定的に重要だということを深く認識しています。事実、諸言語は人々の集団や個人のアイデンティティ(自己同一性)と平和共存にかかせません。諸言語は、世界と地域とが調和を保ちつつ持続的発展をとげるための戦略的な要因をなしています。諸言語は「万人のための教育」で掲げられている6項目の目標(*1)と、国際連合が2000年に採択した「ミレニアム開発目標」(以下、「ミレ目標」と略す)(*2)を達成するために最大限に重要です。諸言語は社会の統合の要因として、極度の貧困と飢餓を撲滅する(ミレ目標1)ためには 戦略的な重要性を持ち、また普遍的な初等教育を達成する(ミレ目標2)ためには

識字、学習と生活力を身に付ける上での柱となります。HIV/AIDS、マラリア、その他の病気のまんえんと闘う(ミレ目標6)ためには、直面している人たちが使う言語によるものが必須です。そして自然環境の持続可能性を確保する(ミレ目標7)のために、現地のそして先住民の知恵と知識とを保護することは現地と先住民の言語に密接に結びついています。さらに、文化の多様性が言語の多様性と密接に結びついていることは、文化の多様性に関するユネスコ世界宣言(*3)とその行動指針(2001年)、無形文化遺産の保護に関する条約(*4)(2003年)、文化的表現の多様性の保護と促進に関する条約(2005年)に示されている通りです。しかしながら、今後数世代の間には、世界で話されている七千の言語の内の50%が消滅するかもしれません。

現在学校やサイバースペースでは、その内四分の一に満たない言語しか使われていず、多くの言語は散発的に使われるにすぎません。何千もの言語が、日常のコミュニケーション手段として人々の集団で使われているにもかかわらず、教育体系、通信手段、出版業やいわゆる公的な場面から疎外されています。

われわれには緊急な行動が必要ですが、いかにすべきでしょうか。

それぞれの言語コミュニティに対しては、第一言語ないし母語を、教育も含めてなるべく広範にまた頻繁に使うような言語政策を立て、国民的または地域的、そして国際的に使われる言語の習熟と併行させるよう奨励します。また、優位な言語を話す人たちにも、他の国民的、地域的言語、さらに一つか二つの国際的な言語に習熟することを奨励します。複数言語主義が完全に根付いてこそ、全ての言語がグローバル化した世界の中に自らを位置付けることができます。そこでユネスコは各国政府、国際連合の諸機関、市民社会の諸組織、教育機関、専門家団体、そのほかの全ての関係者に対して、個人的、集団的な諸場面において、全ての言語、特に絶滅に瀕している言語に対する尊敬、促進と保護とを増進させる取り組みをされるよう要請します。教育面、サイバースペース面、教養面での取り組みによって、絶滅に瀕している言語の保全事業によって、社会の融合のための道具に言語を使おうとすることによって、言語と経済の関係、言語と先住民の知識の関係、言語と創作の関係などを探求することによってか、以上いずれの手段によっても「言語は重要だ」という考えがあらゆるところに広報されることが必要です。この意味で2008年の2月21日が第9回の国際母語の日(*5)にあたることは重要な意義をもち、諸言語の発展をはかる方策を導入するのに適した期限といえます。われわれの共通の目的は、国家的、地域的、国際的な段階において、言語の多様性と複数言語主義の重要性が教育・行政・立法制度の中で、文化的な表現とコミュニケーション手段の上で、そしてサイバースペース上や商業上も認められることです。

(以下は前と同文)。